

カント『第一批判』における Realität

と可能性について

犬 竹 正 幸

I

カントは「原則論」において、第四群の原則である「様相の諸原則」の一つを次のように提示している。「経験の形式的制約（直観と概念から見た）に合致するものは可能である」（A218／B265）。カントはここで彼の超越論的考察に基づいて「物の可能性」の意味を確定している。「実在性」と「可能性」をめぐる諸問題は、この命題の内に凝集されていると言える。本稿は結局この命題の解釈ということに帰着するだろう。

まず第一に言われるべきことは、「可能性」は「現実性」「心然性」と並んで「様相」のカテゴリーに属するということである。この様相カテゴリーは他の諸カテゴリーとは異なった特殊性を持つ。即ち「このカテゴリーは、それらが述語として付加されるところの概念を客観の規定としてはほんのわずかも増大せず、ただ認識能力に対する関係のみを表現する」（A219／B266）。様相カテゴリーは客観の述語ではあるが客観の規定に関わる述語ではない。ここで「客観の規定に関わる述語」とは、或るものがどんなものであるか、いかにあるか、どんな関係にあるかといったことを決定するような述語のことである。これが「real な述語」と呼ばれる。即ち、事物（Sache, res）の事物性（Sachheit, realitas）を確定するのが real な述語である。しかし real な述語において、或るものが具体的に然々の物であって他の物ではないことを確定するものと、或るものが総じて事物であることを確定するものが区別されるであろう。後者の real な述語が様相以外のカテゴリーである。とにかくカントが概念や直観が「実在性を持つ」と語る時、それら表象が事物の事物性を構成しているということの意味している。

さて「可能性」は real な述語ではない、つまり事物の事物性を構成するような述語ではない。にも拘らずそれは事物について何かを語っている。何が語られているのか。事物に対する認識能力の関係が語られている。「様相」つまり事物の存在の諸々の様式は、カントにおいては認識能力に対する事物の関係の諸々の仕方に基づいて確定されている。しかし従来より物の可能性は、その思惟可能性として、思惟の能力を基準としてはいなかったか。カントにおいて事物と認識能力とのどんな新たな関係が樹立されたのか。

『第一批判』におけるカントの主要課題は「ア・プリオリな対象認識はいかにして可能か」というものである。即ち、対象が与えられるに先立って対象について何事かを決定するような認識の可能根拠の究明が課題である。この課題の解決のために「思考法の革命」として提出された思想が「コペルニクスの転回」と呼ばれる。それは、ア・プリオリな認

識に関しては、認識が対象に従うのではなく、対象が認識能力に従うという考えである⁽¹⁾。ただし対象の理論的認識の場合、対象は常に与えられねばならず、ただその対象を規定する仕方に関し、上の問題が生じる。さて「コペルニクスの転回」における問題の核心は、ア・プリオリな認識が対象に関係することの、あるいは対象の規定をなすことの根拠は、対象そのものの側に求められるか、それとも認識能力の側に求められるかということである。ここでそのような根拠が対象の側に求められる限り、そうした対象の性格が「物自体」と呼ばれ、それ自身ではこうした根拠たる資格を持ち得ないような対象の性格が「現象」と呼ばれる（現象と物自体あるいは *Noumenon* との区別は、『就職論文』では「感性の対象」と「純粹悟性の対象」との区別として捉えられていた。しかしそこでは、一方で現象は感性の制約だけに基づいて「対象」として成立するとみなされ、他方で純粹悟性による *Noumenon* の認識はいかにして可能かという問いは全く立てられていなかった。この二つの事態に対する反省がカントを『批判』へと導き、これに応じて「現象」と「物自体」の両概念も⁽²⁾上述のように新たに捉え直されたのである。

「物自体」とは物の諸々の規定の根拠ないし土台として見られた物、即ち *υποκείμενον*（基体）としての物である。これに対し、そうした根拠が認識能力の内に求められる限り、この認識能力の方が *υποκείμενον* とみなされてくる。これに応じて、元々の *υποκείμενον* 性格を奪われた物の方は *Objekt* あるいは *Gegenstand* つまり主観に対して立つものとして捉えられるようになる。

II

カントにおける「認識」をめぐる問題において最重要事の一つは、認識の構成要素として、「直観」と「概念」ないし「思惟」とを区別し、その各々に独自の認識能力即ち「感性」と「悟性」を指定するということである。ここでは、直観に関するカントの見解を見つつ、ア・プリオリな認識の可能性の一要件たる「ア・プリオリな直観はいかにして可能か」の問題に移る。

カントによれば、いかなる認識も直観において対象に直接関係し、直観においてのみ我々に対象が与えられるが、この与えられる仕方は、対象により触発されるという我々の「心の受容性」に根本的に依存し、この心の受容性が「感性」と呼ばれる。ところで、対象による触発に基づく限りで成立する直観は「経験的直観」であるが、そうすると、ア・プリオリな直観即ち対象が与えられるに先立って対象に関係し、対象について何事かを規定するような直観は、いかにして可能か。カントによれば、それは経験的直観の形式としてのみ可能である。つまり、なるほど対象が与えられるのは経験的直観においてのみだが、それが与えられる仕方は、我々の感性の性状に由来するものとして、一切の対象が与えられるという事態から独立であり、ア・プリオリに知られる。ア・プリオリな直観は、この感性の形式としてのみ成立する。

ところで、この「対象が与えられる仕方」の「対象が与えられる事態」に対するア・プリオリ性あるいは先行性の意味するところは、前者が後者の「制約 (*Bedingung*)」となっているということである。カントはこれを、前者が後者を「可能ならしめる

(möglich machen)」と言う。つまり、我々の感性という認識能力の根源的受容性格を「根拠」として初めて我々に対象が与えられ得る。言い換えれば、我々に与えられる限りでの対象は必然的に感性の制約に従う。ア・プリオリな直観は感性の制約に属するものとして、この対象の「可能性」を表象する。その意味は、現実に存在する事物の領域よりも広い領域がこれによって表象されるということではなく、事物が我々にとって Dasein する限りで必然的に有さねばならぬ規定が表象されているということである。その規定とは、ここでは空間と時間である。空間・時間が事物の規定であること、つまり空間・時間の述語が real な述語であることの根拠は、それらがア・プリオリな直観においてのみ表象されるものとして我々の感性に起源を有し、この感性が我々に与えられる対象を（直観から見て）可能ならしめる制約であるという点にある。ただし、対象の Dasein そのものを産出するというのではなく、事物が我々にとって直観の対象として Dasein する仕方⁽³⁾が、感性の性状を根拠として予め規定されるということである。

カントにおいては、ア・プリオリな表象における事物の可能性は、事物の現実性に対する何らかの欠如態としては捉えられていず、むしろ事物の現実性の制約、しかも認識能力の内に存する制約との関係において事物の可能性が捉えられている。即ち、ア・プリオリな表象において表象される事物が可能であるということは、その事物の表象の起源が認識能力の内にあり、この認識能力を根拠として、その事物が Dasein するために必要とする規定が事物に賦与されるということを言う。ただし、事物の Dasein は我々においては、あくまで経験的直観においてのみ表象される。従って、ア・プリオリな表象における事物の可能性は、その表象が「経験」の制約（ここでは直観から見た）に所属することからして確定される。

ここで Realität と Möglichkeit の関係を整理してみれば、次のようなことになる。空間・時間はア・プリオリな表象として一定の表象内容を含んでいる。この表象内容が事物の規定を成すことが示されるなら、この表象は Realität を持つと言われる。しかし表象が事物の規定を成すと言うためには何らかの根拠が提示されねばならない。ここで表象が経験的なものなら、この根拠は経験の諸対象の内に求められ、適当な対象を例示すればよい。しかしア・プリオリな表象の場合には、それが事物の規定となることの根拠は認識能力の内にある。この根拠としての認識能力と、それにより事物の規定を成すことが証示されたア・プリオリな表象との関係を表現するのが「可能性」である。だから「可能性」は確かに real な述語ではないが、しかしそれは、表象の Realität の根拠づけられて有ることを、事物について述語するものである。こうしたことはまた悟性の純粹概念であるカテゴリーにもあてはまるであろう。

III

ところでカントは上の可能性の原則の内、単に「経験の制約」とは言わず「経験の形式的制約」と言っている。「経験の形式的制約」とは「経験の形式」を構成する制約ということである。この経験の形式を構成する制約にカテゴリーが所属することを示し、そのことによりカテゴリーの客観的 Realität を証明することこそ、かの「カテゴリーの超越

論的演繹」の眼目である。さてカントは、この「形式」ということで、いわゆる一切の内容を欠いた空虚な形骸のようなものを考えてはいない。それは、なるほど一切の経験的内容を含みはしないが、しかしア・プリオリな内容を含んでいる。「経験の形式」とは、いかなる多様な諸経験をも、それらが総じて「経験」と呼ばれることを可能にしているところの「一 (Einheit)」あるいは一なる本質を意味する。この本質があらゆる諸経験に先立って先取り (antizipieren) されるが故に、経験の形式はア・プリオリな内容を含むと言われる。「悟性がア・プリオリになしうるのは、可能的経験一般の形式を予料することだけである」(A246/B303)。

しかし、このような先取りはどうして可能なのか。この問題は、言い換えれば、経験の対象についてのア・プリオリな総合的認識はいかにして可能かという問題である。カントによれば、経験とは知覚を通じて対象を規定する認識である。しかし、この経験における対象の規定は、随意勝手に行なわれたり、知覚に与えられたものをそれらが出会うがままに連合することにより成立したりするものではない。経験が「客観における結合」を表象すべき限り、予め一定の結合の仕方に基づいて経験的諸内容が結合されるのでなければならない。この先行的な結合の仕方一般を表わすものが「純粹綜合の概念」としてのカテゴリーである。⁽⁴⁾即ちカテゴリーは、経験における対象規定の根拠として、経験を可能ならしめる制約に属する。しかし、カテゴリーがそうした制約に所属しうるのは、カテゴリーのア・プリオリな源泉としての悟性のなす「純粹綜合の Handlung (更にこの統一の究極源泉が超越論的統覚であるが)」の故である。ところで、カテゴリーが経験における対象規定の根拠であるということは、カテゴリーが、経験の一切の対象たる所以をなしている、あるいは対象の対象性を構成している、ということ意味する。即ちカテゴリーは客観的 Realität をもつ。このようにして、ここでもまた前章におけるのと同様の、Realität と可能性との関係が見られるであろう。

IV

カントの「批判」を貫く核心的な思想は「形式が質料に先立つ」というものである。⁽⁵⁾即ち、経験に起源を持たぬようなア・プリオリな諸表象 (空間・時間及びカテゴリー) が、なおかつ経験の諸対象に必然的に関係し、それら諸対象の本質的規定となりうるのは、こうした諸表象のア・プリオリな源泉を認識能力の内に追求し、その認識能力の独自の性格において、つまり「対象を受容的に直観する仕方 (感性の形式)」あるいは「直観の多様を自発的に結合する仕方 (悟性の形式)」としてア・プリオリな表象の本質を見てとり、この認識能力の「可能ならしめる」働き⁽⁶⁾の故に、それら表象が、与えられた事物の事物性をア・プリオリに構成しうる、ということを示すことによる。

こうして、初めに提示した「可能性の原則」の意味するところが十分明らかにされたと思われる。「経験の形式的制約に合致するものは可能である」。「可能性」という述語は real な述語ではない、つまり事物の規定に属する述語ではない。それは、事物の規定に対する認識能力の関係を表現している。即ち、認識における事物の規定の形式つまり対象を直観する仕方及び対象を思惟する仕方が、各々の認識能力の働き (Affektion と

Funktion) に起源を有するものとして、経験における事物の規定のア・プリオリな根拠となっていること、またア・プリオリな表象は、こうした形式に所属することによってのみ経験の対象のア・プリオリな規定となる（つまり客観的 Realität をもつ）ことができるということ、こうしたことが原則において語られているのである。「ア・プリオリ」とは、カントがこの語に込めた意味に従うなら、経験を可能ならしめる根拠への関係を指し示すものであり、従って、ア・プリオリな表象は、その表象の内容に何が含まれているかによってではなく、まさにそれがア・プリオリであるが故に、事物の可能性を表象すると言えるのである。

[哲学 研修員]

参考文献

I. Kant

“Kritik der reinen Vernunft”

“Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik”

“De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis”

M. Heidegger

“Kants These über das Sein”

H. Holzhey

“Das philosophische Realitäts Problem zu Kants Unterscheidung von Realität und Wirklichkeit”

高橋昭二

「カントの弁証論」

— 註 —

K.d.r.V.のテキストはphB版を用いた。なお第一版、第二版の頁数を各々、A、Bで表わす。

(1) vgl.B XIV

(2) 「現象」が「現象」と呼ばれるのは、それが単に「感官の対象」であるという理由だけによるのではない。感性という認識能力の性状を根拠として初めて、それが我々に与えられるが故に、そう呼ばれるのである。もし仮に一切の感性的認識が対象に従うとしたら、カントはその対象を「現象」とは呼ばず「物自体」と呼ぶだろう。またカントは、『批判』において初めて Erscheinung と Phänomenon の区別を確立している。つまり単なる感性だけで成立するのは「未だ無規定」な Erscheinung だけであって、純粹悟性の real な使用において初めて、それが Phänomenon ないし「経験の対象」として規定される。これに対し、『就職論文』では、「感性の対象」に関しては悟性の論理的使用だけが成立し、real な使用は成立しないと考えられている。

(3) カントは、ア・プリオリな表象の客観的 Realität を示すことと、その表象の対象の可能性を示すこととは、同じことであると言う。それは、「可能性」の述語が real な述語の一つであるということではなく、その表象が何を内容として含むのであれ、そうしたものがまさに対象の規定に属することの如何が、対象規定のア・プリオリな根拠たる（その意味で対象を可能ならしめる）認識能力と、その表象との関係に基づいて、決定されるということである。

(4) vgl.A79/B105

(5) vgl.A267/B323

- (6) カントは、感性の性格を *Rezeptivität* あるいは *Fähigkeit* と呼ぶ。何かを受け取るということは、受け取る側に何の用意もなしに起ることではない。そこには受け取り得るための何らかの備えがなくてはならない。この「受け取る仕方」が、対象が与えられることを可能にするのである。またカントの言う *Vermögen* は、心理学的に考察される諸能力というよりも、何かあるものをそのものたらしめる (*ver-mögen*) 根拠のことである。

Von der Realität und Möglichkeit bei Kants » Kritik der reinen Vernunft «

Masayuki Inutake

Im » Grundsatz der Möglichkeit « bestimmt Kant den Sinn der Möglichkeit der Dinge nach seinen transzendentalen Betrachtungen. Der Grundsatz sagt : » Was mit den formalen Bedingungen der Erfahrung (der Anschauung und den Begriffen nach) übereinkommt, ist möglich «. Durch Interpretation dieses Satzes wollen wir Kants Einsicht über das Verhältnis der Möglichkeit mit der Realität im Lichte bringen.

Nach Kant sind die Kategorien der Modalität, d. i. die Prädikate der Möglichkeit, Wirklichkeit und Notwendigkeit keine realen Prädikate. Ein reales Prädikat ist nun dasjenige, das die Bestimmung des Dinges oder die Sachheit der Sache ausmacht. Dagegen betreffen die Prädikate der Modalität diese Bestimmungen der Dinge nicht. Was drücken denn diese Prädikate aus ? Nach Kant drücken sie ein Verhältnis der Dinge zum Erkenntnisvermögen aus. Warum aber wird die Möglichkeit der Dinge aus dem Verhältnis der Dinge zum Erkenntnisvermögen bestimmt ?

Dies kann aus dem revolutionären Gedanke Kants über dieses Verhältnis, nämlich aus der » kopernikanischen Wende « gesehen werden. Nach diesem Gedanke soll der Grund der Bestimmung der Dinge im Erkenntnis a priori nicht nach der Dinge, sondern nach dem menschlichen Erkenntnisvermögen gesucht werden. Die objektive Realität der Erkenntnis oder der Vorstellungen a priori gründet sich auf die Beschaffenheit oder Handlung dieses Erkenntnisvermögens, nämlich der Sinnlichkeit und des Verstandes. Diese Beschaffenheit oder Handlung heißt transzendental, d. i. sie geht allen empirischen Erkenntnissen vorher und macht die Form oder das Wesen der Erfahrung aus. Um die objektive Realität der Vorstellungen a priori zu zeigen müssen wir also beweisen, daß der Ursprung a priori dieser Vorstellungen im Erkenntnisvermögen liegt, das die Form der Erfahrung ausmacht, und daß die Vorstellungen um deswillen zu den formalen Bedingungen der Erfahrung gehören.

Das Prädikat der Möglichkeit ist selbst kein reales Prädikat, drückt aber das Verhältnis der Dinge zu diesem Erkenntnisvermögen aus, d. i. das drückt es aus, daß die Vorstellungen a priori, auf solchen Gründen beruhend, die Bestimmung der Dinge (Realität) ausmachen.